

# 土佐国分寺跡

—第二次発掘調査概報—



1989年 3月

南国市教育委員会

# 土佐国分寺跡

——第二次発掘調査概報——

1989年 3月

南国市教育委員会

## 序

土佐国分寺跡は、現国分寺の周辺に存在する土壘が創建当時のものと推測されたことにより、大正11年10月12日に国の史跡に指定されていますが、土壘以外の遺構については、明らかではありませんでした。

そこで、南国市教育委員会では、具体的な伽藍配置等の内容を明確にするため、国・県の補助を得、昭和62年度（第一次）より発掘調査に着手し、初めて建物址を検出するなどの成果がありました。

本報告書は、昭和63年度（第二次）に調査したものをまとめたものです。本年度は特に金堂北側地区で、僧房跡とみられる建物址群が検出されるなどの成果が得られました。

今回の調査にあたり、ご指導をいただいた高松短期大学教授・岡本健児先生終始ご協力を頼った高知県教育委員会文化振興課、また調査に理解とご協力をいただいた国分寺・林廣裕住職、ならびに地権者の皆様、国府地区の皆様方に心から感謝を申し上げる次第であります。

平成元年3月30日

南国市教育委員会

教育長 鈴江 廣幸

## 例　　言

1. 本書は、昭和63年度国庫補助事業として南国市教育委員会が実施した史跡土佐国分寺跡の発掘調査の概報である。
2. 調査は、南国市教育委員会が主体となり高知県教育委員会の指導を得て実施した。発掘調査は、高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班上幹山本哲也、主事岡本桂典が担当し、調査事務は南国市教育委員会社会教育課社会教育係浜田清貴が担当した。なお、岡本健児高松短期大学教授からは、調査全般にわたって懇切な御教示、御助言をいただいた。厚くお礼申しあげたい。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図上段は、国土地理院発行2万5千分の1（ときやまだN 1-53-28-7-1、高知7号-1）を、第2図は2千5百分の1高知広域都市圈図No 9及び16を複製使用したものである。なお、第3図は大正10年8月に作成された国分寺境内平面図（縮尺300分の1）を複製して使用したものである。方位は第1・2図が方眼紙（G・N）、第3図が磁北（M・N）によるものである。
4. 出上遺物の実測図は、 $\frac{1}{2}$ 縮尺に統一した。また、造構平面図及び土層断面図は縮尺 $\frac{1}{20}$ による実測図を $\frac{1}{2}$ 又は $\frac{1}{4}$ に縮尺して使用した。
5. 本書の編集は南国市教育委員会が行い、執筆は山本哲也が担当した。
6. 調査にあたっては、林廣裕住職をはじめ、地権者の田内成実氏並びに地元国分地区の皆様方からは多大な御協力を頂いた。また、宗教法人国分寺関係者各位には、種々御協力、御援助をいただいた。文末ながら、ここに改めて深くお礼申しあげたい。

## 本文目次

I 土佐国分寺跡の沿革 .....	1
II 調査に至る経緯と経過 .....	3
III 調査の概要 .....	5
IV 主要遺構と遺物 .....	8
遺構 .....	8
遺物 .....	11
V まとめ .....	12

## 挿図目次

第1図 土佐国分寺跡位置図
第2図 土佐国分寺跡と調査地区の位置
第3図 調査地区及び検出遺構位置図

## 図面目次

- 図 1 土佐国分寺跡概要図
- 図 2-1・2 第5調査区（鐘楼西側地区）
  - 遺構平面図（S B 1）
- 図 3 第6調査区（大師堂前地区）
  - 遺構平面図
- 図 4 第7調査区（金堂北側地区）
  - 遺構平面図
- 図 5 第7調査区土層断面図
- 図 6 金堂裏出土瓦（1）
- 図 7 金堂裏出土瓦（2）

## 図版目次

- P L 1 第5調査区（鐘楼西側地区） S B 1 検出状態（東から）
  - 同 上 （南から）
- P L 2 第6調査区（大師堂前地区） 遺構検出状態（南東から）
  - 同 上 （北から）
- P L 3 第7調査区（金堂北側地区） 遺構検出状態（南から）
  - 遺構検出状態（南から）
- P L 4 第7調査区全景（南から）
  - S B 4 柱穴検出状態（東から）
- P L 5 S B 4 北側柱穴検出状態（東から）
  - S D 5 検出状態（北から）
- P L 6 S B 3 柱穴（東から）
  - S G 1 柱穴（東から）
- P L 7 第7調査区出土瓦
- P L 8 出土遺物（須恵器）
- P L 9 出土遺物（土師器）

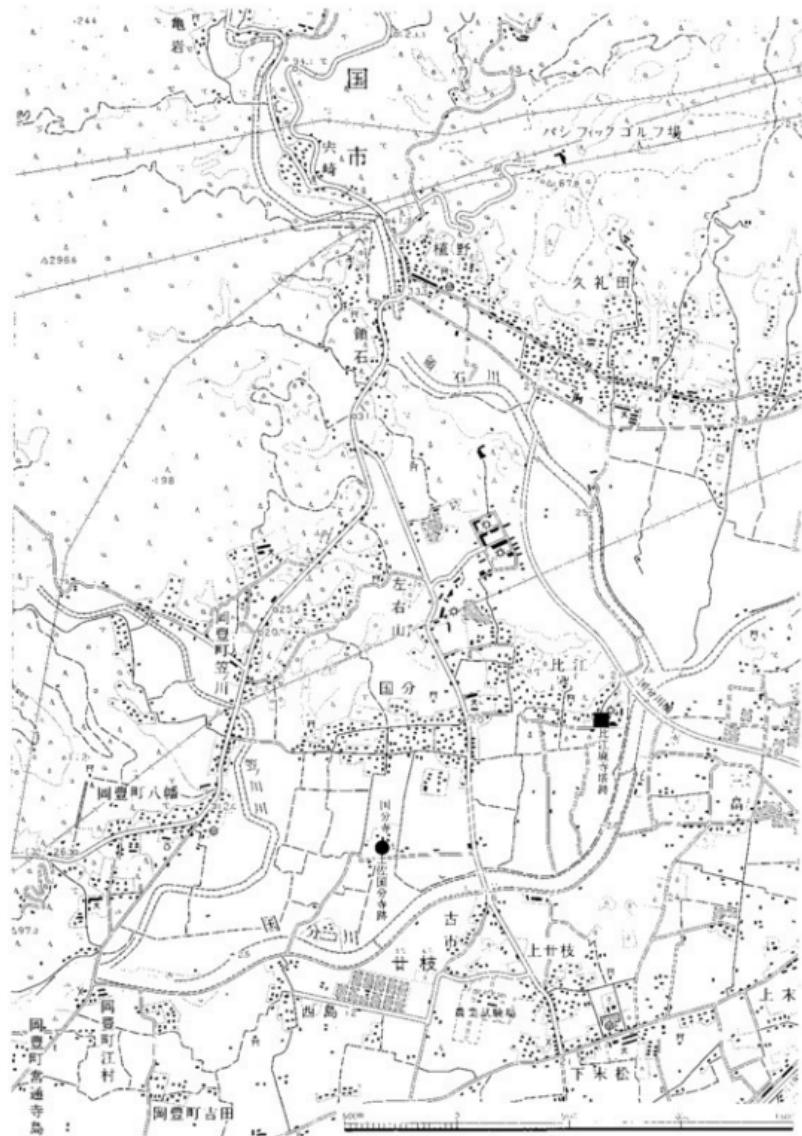
## I 土佐国分寺跡の沿革

土佐国分寺跡は、寺域周辺に創建当時の土壘とみなされる土壙（高さ1.5m～2m, 3m～4m）が遺存し、また、寺域一帯に奈良時代の瓦片、土器片等が散布していることなどから、大正11年10月12日に国の史跡に指定され、現在、宗教法人国分寺（真言宗智山派、四国第二十九番靈場）の寺地及び畠地、山林として往時の名残りをとどめている。

寺域周辺の土壙及び現金堂北裏の段状地形等の他は、特に奈良時代寺院址の痕跡を示す遺構等は所在しないが、現書院南側の内庭園に庭石として置かれている塔心礎（珪岩製、幅1.1m長さ1.5m以上）が、また、平安時代前期の製作とみられる梵鐘（総高80.3cm、四葉複弁蓮花文の撞座をもつ。昭和31年6月28日・重要文化財に指定）が伝わっている。なお、現金堂は、長宗我部國親、元親父子の再建によるもので、昭和25年8月29日に国の重要文化財（建造物）に指定されている。

本寺院跡開発の発掘調査としては、これまで史跡の現状変更等に伴う調査が数回実施されて柱穴、溝、ピット、瓦溜等が検出され、奈良時代～平安時代の土器等、串状の杉木にさされた富貴神室十枚などが出土しているが、具体的な伽藍の内容を明らかにするに至っていない。<sup>註1</sup> 伽藍配置については、寺域周辺の土壙の位置及び瓦の散布状況、検出遺構、出土遺物等の内容から、東西500尺、南北450尺の規模をもつ東大寺式であることが推察されており、奈良時代中頃から造寺が開始されて平安時代前期には完成し、平安時代後期には火災のため創建当初の伽藍が焼失したものと考えられている。<sup>註2</sup> また、創建時期に関しては、軒丸、平瓦の文様構成、現存の塔心礎の内容などに、白鳳～奈良時代前期の影響がうかがわれることから、創建期が奈良時代中頃以前に遡る可能性がもたれることや、先行寺院跡の存在などが指摘されている。<sup>註3</sup>

土佐国分寺跡の内容に関する具体的な資料を得たうえ、今後の保存方策の検討を図ることを目的に、南国市教育委員会では文化庁、高知県教育委員会、宗教法人国分寺と協議のうえ、昭和62年度から計画的な発掘調査に着手した（第一次発掘調査）。この調査では、現書院北側、寺域東側、現金堂北側、鐘楼北側の各地区に発掘区を設定し、遺構等の検出作業を行った結果、鐘楼北側地区から礎石建物址の一部と考えられる遺構（S B 1）が発見され、創建期の具体的な遺構が確認されたほか、柱穴、溝、ピット等が検出された。昭和63年度では、第二次発掘調査として、鐘楼西側、大師堂前、現金堂北側の各地区を対象に調査を行い、現金堂北側地区から僧房跡の一画とみられる掘立柱建物址群が検出される等の成果が得られた。本寺院跡の内容解明に、基礎的資料が段階的に蓄積されており、今後の調査の進展によって、さらに究明されるものと期待される。



第1図 土佐国分寺位置図(国土地理院2万5千分の1地形図「土佐山田」を使用)

## II 調査に至る経緯と経過

第一次発掘調査において、鐘楼北側地区から、地業の施された掘方をもつ礎石建物址の一画が検出された（S B 1）。<sup>註4</sup> 衍行 7 m 以上梁間 5.8m の範囲で確認された S B 1 について、全体の形状、付属施設の有無等を確認するために、鐘楼西側の一画を調査区とした。また、S B 1 北西部についての遺構形成状況を把握するために、大師堂前に調査区を設けた。

金堂北側地区については、第一次発掘調査で溝跡、柱穴、ピット等が検出され、築地の存在がうかがわれたため、寺域北側の土塁（土壤）の西側延長部分の再確認と併せて、第一次発掘調査時の第 3 調査区西側部分を調査区とした。<sup>註5</sup>

なお、各発掘対象地区については、昨年度の調査区名を続けて、第 5 ~ 7 調査区の名称を付することにした。各調査区の地番及び調査期間、調査面積は以下のとおりである。

第 5 調査区（鐘楼西側地区）	南国市国分543番地	昭和63年 9月16日から 9月25日まで。 発掘面積 60m <sup>2</sup> 。
第 6 調査区（大師堂前地区）	南国市国分543番地	昭和63年 9月26日から10月 3 日まで。 発掘面積 114m <sup>2</sup> 。
第 7 調査区（金堂北側地区）	南国市国分529・530番地	昭和63年10月 4 日から10月31日まで。 発掘面積 480m <sup>2</sup> 。

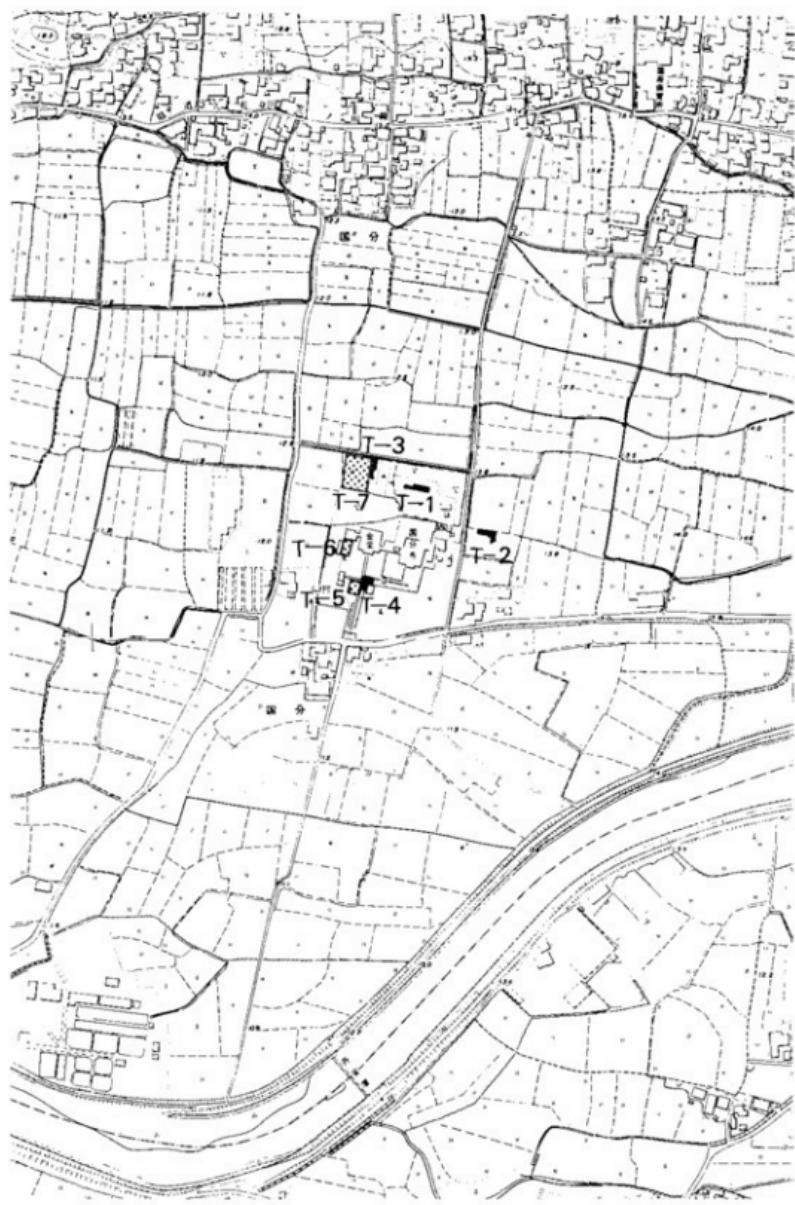
註1 国本健児「第4章 古代の文化第2節寺院」『南国市史上巻』昭和54年 南国市

註2 国本健児他「土佐国分寺 鐘楼建立・書院改築に伴う発掘調査」昭和53年 土佐国分寺刊

註3 国本健児編『日本の古代遺跡39高知』平成元年 保育社

註4 「土佐国分寺跡 第一次発掘調査概報」南国市教育委員会 1988. 3

註5 註4と同じ



第2図 土佐国分寺跡と調査地区の位置 1/5,000

### III 調査の概要

今回の調査では、S B 1周辺の遺構形成状況の把握、寺域北限及び僧房等を確認するために、鐘楼西側、大師堂前、現国分寺金堂北側について発掘調査を実施した。

各発掘区については便宜上、第5～7調査区の名称を与えて区分し、第1次発掘調査時の呼称に継続させた。なお、第1・2発掘調査時における第1～7調査区の名称は、あくまで便宜的なものであり、将来的には測量基準点設置による方眼座標のなかでの調査区名に変更してゆきたいと考える。

#### 第5調査区（鐘楼西側地区）

鐘楼西側に、東西6m南北10mのトレンチを設定し、第1次発掘調査で検出されたS B 1の規模及び付属施設の有無について確認を行った。発掘区の基本層序は、第I層褐色粘質土、第II層暗褐色粘質土、第IV層黄茶色粘質土の3層に区分され、第IV層上面から掘方が検出された。この掘方は、礎石下の地盤痕とみられるもので、検出状況は昨年度と同様の内容である。S B 1北西側角に該当する掘方の北半部は、近現代の掘削により破壊されていたが、東西2間、南北3間分の掘方が検出され、建物西縁が確認された。今回の調査で、S B 1は、桁行11.3m、梁間5.8m（三間×六間・38×19.5間棒）を測る礎石建物であることが明らかとなった。なお、S B 1に付属する遺構等は検出されなかった。

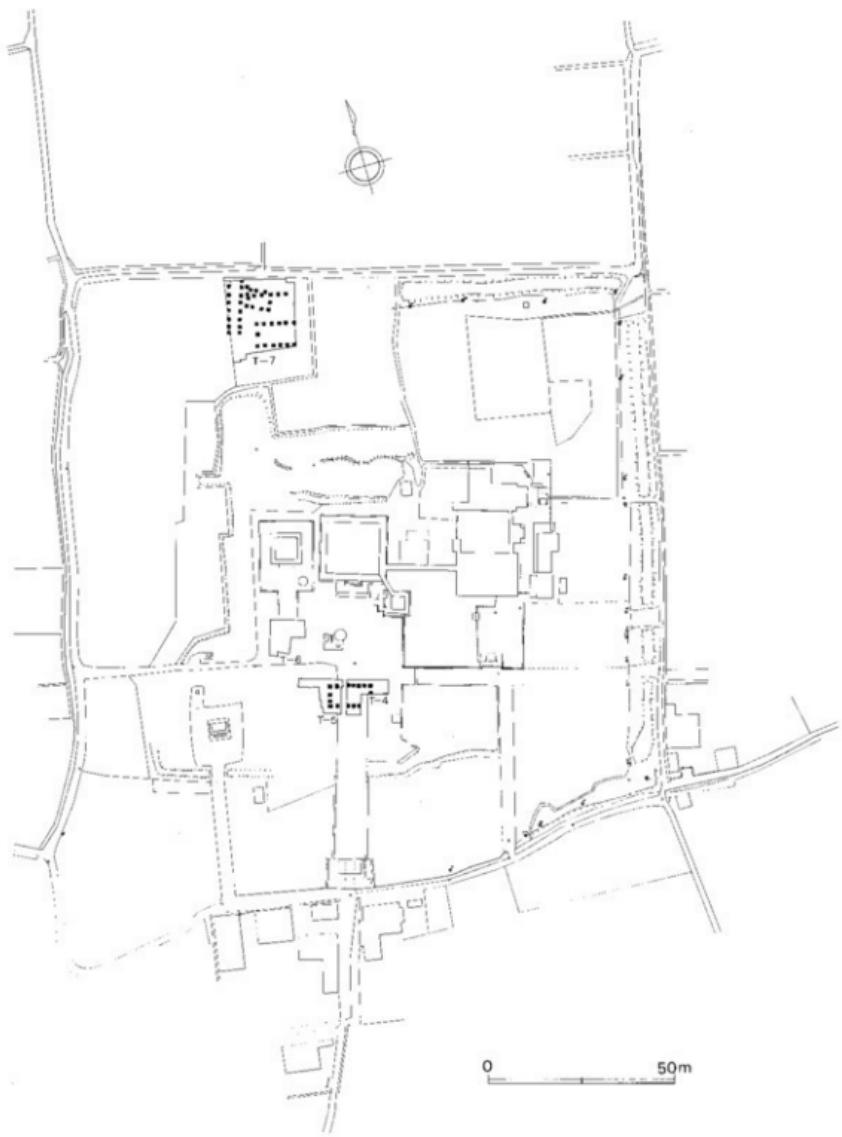
調査は、遺構検出にとどめ、調査後は、宗教法人国分寺の協力を得て厚さ5～20cmで砂を布敷したうえ、厚さ10～15cmの化粧土を加えて養生を図った。なお、S B 1周辺に貼芝を施し、掘方中心部に化粧板を置いて遺構の地上表示を行った。

#### 第6調査区（大師堂前地区）

大師堂南側に東西6m南北12mのトレンチを設定し、一部東側へ6×7mの範囲で拡張した。調査区は第5調査区の北西部に位置し、S B 1関連遺構の有無、廻廊等の所在についての確認を行った。発掘区の基本層序は、第I層褐色粘質土、第II層暗褐色粘質土、第IV層黄茶色粘質土で、第5調査区と同様である。第IV層上面から、調査区全体にわたって弥生～中世の遺構形成が認められた。なお、調査は遺構検出のみにとどめた。

検出遺構は、竪穴住居址3棟、柱穴、溝等で、柱穴のなかには1辺1.1～1.2mを測る方形の掘方を有するものがみられ、本寺院跡に関連する奈良～平安期の遺構であると考えられる。また、竪穴住居址は平面形態から1辺5.8～6.0mの方形住居址と推察されるもので、これまでにも本寺院跡から弥生後期～終末の竪穴住居址等が検出されていることから、当該期の遺構であると判断される。

本調査区では、S B 1関連遺構等は検出されなかった。また、柱穴の配列からは、調査区南東部で、北東方向の棚列とみられるピットが確認されただけで、遺構の性格、内容については明らかにすることできなかった。また、検出遺構全体については、第IV層上面での検出で、



第3図 調査地区及び検出造構位置図

層位的な重複関係を把握することはできなかった。

#### 第7調査区（金堂北側地区）

第3調査区（第1次発掘調査）の西側に接して調査区を設定した。現寺域北部に位置し、土星（土壇）の西側延長部に該当する。第3調査区北端部で築地状の段状地形及び柱穴、溝、ピット等が検出されたため、寺域北部の内容を確認するために調査対象地区とした。

調査は、調査区西側に幅3m長さ20mのトレンチを設定して確認作業を行った結果、柱穴群（SG1）等が検出されたため、東側へ長さ15mの範囲で拡張し、遺構検出を実施した。調査区の基本層序は、第Ⅰ層灰褐色粘質土（表土）、第Ⅱ層灰茶色粘質土（耕作土）、第Ⅲ層茶褐色粘質土、第Ⅳ層褐色粘質土、第V層淡茶褐色粘質土（地山土）に区分されるもので、第V層上面から遺構が検出された。

検出遺構は、掘立柱建物群、廻廊状遺構、溝、土壤、柱穴、ピット等で、遺構の重複関係がみられ、すくなくとも3～4時期にわたる遺構変遷がみられた。出土遺物等の内容から、白鳳～平安時代前半にかけて遺構形成が行われたものと考えられ、土佐国分寺跡関連の具体的な遺構を検出することができた。

掘立柱建物群等は、建物・柵列・柱穴の主軸方位から概ねN-16°-E（SB2）、N-18°～20°-E（SB4・SG1）及びN-109°-E（SA1）、N-30°-E（SB3）の3類に類別することが可能である。また、SB3はSB2に切られており、また、建物主軸も他の遺構と比べて異なる様相を示している。SB3の柱穴中からは、白鳳後期～奈良時代初頭とみられる須恵器杯蓋、土師器等が出土しており、国分寺造営前の遺構であると判断される。また、SB2・SA1・SB4・SG1等の柱穴中からは、少量の土器細片ではあるが白鳳末～奈良末の須恵器、土師器片が出土した。なお、SB4の柱穴の一部には、重複関係があり、SB4の柱穴を切る柱穴内からは平安時代前半の綠釉陶器、須恵器、土師器等が出土した。

建物址のなかでSB2は、SB1と同一の主軸をもつもの（N-16°-E）、寺域周辺を囲む土星（土壇）の平面プランもN-16°-Eであることから、土佐国分寺跡の造営に際しては、N-16°-Eをラインとする造営企画が存在した可能性が指摘される。また、SB4・SA1・SG1については（N-19°-E）、SB1・2と先後関係があるものと考えられる。掘立柱建物群の性格については、僧房址の一画とみなされるが、他の御器配置が不明確であることも考慮して、現状では寺域北部の北方建物群として評価しておきたい。

## IV 主要遺構と遺物

### 遺構

第5調査区でS B 1の西側部が確認され、三間×六間の礎石建物址であることが判明した。また、第6調査区では方形の掘方をもつ柱穴、ピット、溝、竪穴住居址等が検出され、第7調査区からはS B 2～4・S A 1～3・S D 4～6・S K 1～3・S G 1等の掘立柱建物址、櫛列、溝、土壠、回廊状遺構等の検出をみた。

第7調査区では、第3調査区で検出された築地状の段状地形の延長は確認されず、S A 1・S G 1等が形成されていることが判明した。また、調査区北側の溝（土壠北側の溝）からも、須恵器、土師器等の遺物が採集されることや、S A 1・S G 1の検出状況等から、第7調査区北側、西側地区にかけて遺構が広範囲に形成されていることが明らかとなった。

主要遺構の概要は以下のとおりである。

#### S B 1

第4・7調査区で検出された三間×六間の東西棟の建物である。今回の調査で、建物西縁部が確認され、桁行11.3m、梁間5.8mを測る建物であることが明らかとなった。第一次発掘調査で確認されたように、一辺1.1m～1.2m×1.4mの長方形形状の掘方をもち、掘方上面に根石を施して、下部は淡茶色土及び黒褐色土による版築を行った地業をもつ礎石建物址であると考えられる。掘方中心間の距離は、S B 1の北縁及び南縁部で1.5m前後、北東隅及び東縁部で1.8m前後、西縁部で1.8m前後を測る。掘方のなかで、建物北縁及び南縁中央部は中心間の距離が1.4～1.5mと狭く、建物中央部で柱心間が詰まる平面形態を呈している。庇等はなくまた、付属施設もみられない。S B 1東縁から推定寺域東限（東側土壠中央ライン）までは約71.30m（240尺）を測り、南限からは約23.80m（80尺）を、推定寺域西限（寺域西側南北道路上）からS B 1西縁までは約65.90m（約222尺）を測る。また、S B 1中央部から推定寺域西限までは約71.30m（240尺）を測ることができ、東西500尺南北450尺として算定した推定寺域のなかでは、中軸線上に位置している。なお、建物主軸はN-16°-Eである。

#### S B 2

第7調査区北部で検出した、桁行13m以上梁間4.8m以上の建物址である。東西6間、南北1間分の柱穴を確認した。1辺0.8～1.1m前後の方形掘方をもち、柱心間の距離は桁行で1.8～2.4m前後を、梁間で2.6m前後を測る。南北2間以上東西6間以上の掘立柱建物址と推察され、建物主軸はN-16°-Eである。検出状況から、調査区北側及び東側への広がりが認められる。南西隅では、S B 3との重複関係がみられ、S B 3より後出の建物址である。柱穴内から、須恵器、土師器片が出土した。

#### S B 3

S B 2に重複して検出された二間×三間の東西方向の掘立柱建物址である。桁行6.0m梁間

4.6mを測り、1辺0.8~1.0mの方形掘方をもつ。柱穴の重複関係から、S B 2に先行する建物址である。建物主軸は、N-30°-Eで他の建物址等と比べて東へ振っている。柱心間の距離は1.8~2.6m前後を測る。柱穴中から白鳳後期~奈良初期とみられる須恵器杯蓋、土師器等が出土しており、国分寺造営前の遺構とみられる。

#### S B 4

調査区南側で検出された桁行六間梁間二間の建物址である。一辺0.9~1.3m前後の方形掘方をもち、桁行10.4m以上梁間6mを測る。西面に庇をもち、建物主軸はN-18°-Eである。柱心間の距離は、桁行で1.8m~2.2m前後、梁間2.8~3.0m前後である。柱穴の一部に、南北棟の北妻とみられる柱穴と切り合いを有する。柱穴中から細片の須恵器、土師器片が出土した。

#### S G 1

調査区西側で検出された南北方向の柱穴列で、西面廻廊とみられる遺構である。一辺0.7~1.1mの方形掘方をもち、柱心間の距離は1.8~2.4m前後を測る。柱穴は、南北14.6m東西3.4mの範囲で検出され、柱穴列の主軸はN-20°-Eである。検出状況から、調査区北、西側への広がりをもち、今後の調査によって内容が明らかになるものと考える。現状では、南北七間東西二間分の検出にとどまった。遺構は、推定寺城（北側土塁延長線上）の北側へ広がっており、今後詳細な検討を要する。

#### S A 1

調査区東端で検出された東西方向の柵列で、8.4m以上の柵址と考えられる。一辺0.6~0.8mの方形掘方をもち、柱心間の距離は1.8~2.4m前後である。柱穴列の主軸は、N-109°-Eである。

#### S A 2

S A 1南側で検出された東西方向の柱穴列で、全長3.6mの範囲で検出された。一辺0.3~0.35m前後の方形掘方をもち、柱心間の距離は1.4~1.5m前後である。

#### S A 3

S B 4北側で検出された柵列で全長6mの範囲で検出された。柱穴は径30~40cm前後の円形で、柱心間の距離は1.8~2.0mを測る。

#### S D 4

長さ1.3m以上幅0.6m深さ12cm前後の東西方向の溝跡である。細片の土師器片等が出土したが、時期不明である。

#### S D 5

北端部で東側へ屈曲する南北方向の溝跡である。東西2.5m南北10.2mの範囲で検出された。幅0.3~0.5m深さ15cm前後を測る。S D 6と連結する溝である可能性をもつ。

#### S D 6

幅0.4~0.6m長さ8.4m以上の東西方向の溝跡で、西側部分は近・現代のかく乱により壊されている。細片の土師器片等が出土した。

### S K 1

S B 3 南側で、S K 2 と重複して検出された、2.3~2.4m を測る楕円状の土壌で、深さ15~20cm前後である。

### S K 2

S K 1 によって切られた2.1×2.7m の楕円状の土壌で、深さ12~16cm前後を測る。

#### その他の遺構

S B 1周辺で、径20~40cm前後の円形のピットが検出されている。これらのピットは杭跡、櫛列等の一部と考えられるが、内容を明らかにすることはできなかった。第5調査区では、奈良~平安時代の遺構とみられる方形掘方をもつ柱穴等が検出されたが、遺構の性格は不明である。また、弥生時代末に形成されたとみられる方形竪穴住居址3棟、中世の溝跡、ピット等が検出されている。第7調査区では、S B 4 に重複した南北棟の北妻柱列とみられる柱穴跡、S G 1南東部で南北棟（東西二間×三間以上）の北妻、西妻と推察される柱列等のほか、柱穴・ピット等が検出されている。これらの柱穴・ピット等の多くは配列性を有し、掘立柱建物址、堀、櫛列等の一画とみなされるが、遺構の性格等については不明である。今後の調査によって明確にされるものと考える。

## 遺物

### 瓦 (図6 PL 7)

#### 女瓦

金堂裏から検出された瓦類は、点数が少ない。1は凹面に糸切り痕を残すもので、凸面はハケ状の整形を施すものである。2は凹面に細い布目を残すもので、一部に模骨痕が認められる。凸面は1と同様にハケ状の整形を施す。3は凹面に布目を残し、一部指ナデによる整形が認められる。凸面には、 $0.8 \times 0.5\text{cm}$ の正格子がみられる。4は細い布目を残すもので、模骨痕が認められる。凸面には、 $0.5 \times 0.5\text{cm}$ の斜格子が約 $7.5\text{cm}$ の単位で認められる。二次焼成を受けている。5は凹面に糸切り痕を残すものである。凸面は $0.4 \times 0.4\text{cm}$ の斜格子の叩きが認められる。6は凹面に糸切り痕を残し、凸面は剥離が著しいが、ナデを施したものと思われる。

#### 男瓦

7は凸面にハケ状の整形を施し、ヘラ削りによる整形を行っている。凹面は、一部糸切りと接合痕が認められる。8は凸面は二次焼成のため整形は不明であるが、凹面には布目が認められる。

1, 3, 8はSG 1から、5はSB 2で、6はSB 4の柱穴中から出土した。また、4はSB 4の覆土中から、2, 7は調査区遺構検出面の覆土中から出土した。

### 土器 (PL 8・9)

#### 須恵器

須恵器杯蓋、身、碗、甕、瓶等、土師器碗、皿等である。1・2・5・12は須恵器杯蓋、3・4・8・9は碗底部である。11は高杯の脚部である。1・2はSB 3から、3はSG 1、8・9はSB 4の柱穴中から出土した。6はSA 1の柱穴中から、他は柱穴及び遺構検出面上の覆土中から出土した。

#### 土師器

5・11を除いて他は、碗底部片である。4・6・8・9・10は高台をもつ碗、5は碗口縁部11は高杯の脚部片である。1～5・7～9はSB 4の柱穴中から、また6・10・11は遺構検出面の覆土中から出土した。

## V まとめ

土佐国分寺跡は、土壙によって寺域が画された東西500尺南北450尺の寺域をもつ東大寺式伽藍配置の国分僧寺であると考えられてきた。推定寺域内には現在、コ字型に残存する土壙（土塙）、段状地形（現金堂北裏）等の寺院関連遺構とみられる地形が存在してはいるが、現存遺構及び断片的な発掘調査資料からでは具体的な伽藍配置について検討を図るうえで、資料的制約が強かった。

昭和62年度から、これまで不明瞭であった本寺院跡について、範囲及び伽藍配置等を明らかにすることを目的とした発掘調査が実施され、初めて計画的な調査が行われるに至った。今回の調査は、第一次に続く第二次発掘調査として推定寺域の一画を対象に遺構等の確認調査を行ったもので、土佐国分寺跡に関連する掘立柱建物址等の遺構が検出され、詳細な検討作業を進めるうえで基礎的な資料を得ることができた。調査で得られた所見をまとめると以下のとおりである。

- (1) 現国分寺の鐘楼西側、大師堂前、金堂北側に調査区を設定し、発掘を行った。その結果、掘立柱建物址・礎石建物址・塀址・櫛列・溝・土塙・柱穴・ピット等が、また、弥生時代末の竪穴住居址3棟、中世の溝等が検出され、白鳳時代～平安時代前半、鎌倉～室町時代に所属する土器が検出された。このなかで、土佐国分寺跡に関連する遺構としては、S B 1～4・S D 4～6・S K 1・2等が検出され、寺域北部に掘立柱建物群が所在することが判明した。
- (2) S B 1は（第7調査区）、西妻が検出され、桁行11.3m梁間5.8mの三間×六間となる東西棟の礎石建物址であることが確認された。検出位置は、推定寺域の中軸線上で從来中門跡が所在すると推定されていた場所に該当する。建物の構造は、中門とはみなされ難い礎石建物で、現状では堂舎の一つとして機能していた建物であると推察されるにとどまる。第一次発掘調査では、掘方内から白鳳末に該当するとみられる須恵器杯蓋に加え、須恵器窯跡で焼成された平瓦片が出土し、奈良時代寺院址から出土する遺物としては時期的に先行する白鳳末～奈良時代初頭の土器等が検出された。土器等が掘方内へ混入した場合を除いて、出土遺物からはS B 1を白鳳末～奈良時代初頭とすることも考慮され、地業を施した掘方をもつ礎石建物址という建物の性格からも、国分寺造営前の堂舎である可能性もある。なお、本寺院址の伽藍配置及びS B 1周辺の遺構形成等について、現状では不鮮明であるため、S B 1の性格等については土佐国分寺跡創建期に関連する遺構として評価することにとどめ、今後の調査成果に基づく総合的な資料検討のなかで再検討を図りたいと考える。
- (3) 第6調査区（大師堂前地区）では、S B 1に関連する付属施設等、廻廊などの伽藍関係遺構等は検出されなかった。また、現金堂周辺へ設定した調査区ではあるものの、整地層

及び整地面等の基壇成形等に関連した地業痕もみられなかつた。調査区では、弥生末と推測される竪穴住居址3棟に加え、奈良～平安期の方形掘方をもつ柱穴等、中世に属する溝・ピットなどが検出された。

(4) 第7調査区(金堂北側地区)では、第3調査区で検出された築地状の段状地形等は検出されず、掘立柱建物址等の建物群が検出された。調査区北側は、北側土壘(土塙)の西側延長上に該当するが、土壘等の痕跡を示す地業等の痕跡もみられず、調査区北東端で北側土壘(土塙)が途切れるような検出状況がみられた。調査区北端のSA1が、土壘(土塙)の延長部であるとすれば、推定寺域北端部に堀跡が存続していたことになり、第3調査区で検出された段状地形を含めて、推定寺域中央部に、土壘によって区画されない空間が所在する可能性がもたれる。また、調査区西側で検出されたSG1等からは、明らかに土壘(土塙)に先行する建物址の所在が、またSB2の検出状況からも土壘(土塙)形成時期とは異なる遺構配置の存在が看取される。

コ字型に遺存する土壘(土塙)は、これまで創建期の遺構として把握され、本寺院跡の範囲及び内容等に関する考察を図るうえで有力な現存遺構と考えられてきた。しかし、土壘(土塙)形成時期については現状では不明瞭であり、土壘(土塙)全体を創建期の遺構として把握するには有力な確証に乏しい。土壘全体を観察すれば、北側土壘では築地上の平坦地形をもつ段状地形が、また、東側及び南側土壘では幅3～4m、高さ1.5～2mに及ぶ盛り上げがみられる。東側土壘の断面観察(現国分寺東口周辺)では、基底部上に河原石による基盤整地が、また、寺域西側の南北道路下で行われた調査時でも同様な基盤整地面がみられ、土壘(土塙)下に推定寺域東側及び西側では河原石による基盤整地が施されていることが明らかである。地形観察の結果からは、東側土壘(土塙)と北側土壘(土塙)では、同じ土堤ではあるものの、構築に相違があるよう見受けられる。

東側及び南側土壘(土塙)は、中世城館跡にみられる河原石の基盤整地の施された土壘に類似し、築地等の痕跡を示す平坦地形の所在はみられない。土佐国分寺跡の変遷については、平安時代後半に火災を受け焼失したとみられる時期から、戦国時代後半に現金堂が再建される時期までの間ににおいて、資料的な空白期間をもつ。この時期の国分寺の変遷については不明ではあるが、おそらく各地の国分寺がたどった過程と同様、平安時代後半以降は衰退していったものと考えられる。ところで、資料的な鎌倉～戦国時代の土器等が出土し、また、第2調査区からは室町時代に位置付けられる屋敷跡の存在が確認されており寺域内外での居住が明らかである。こうした中世の遺物の出土内容からは、完全に廃寺として放棄されず平安時代末以降も寺地として利用されていたことが想起される。

寺域を画する土壘(土塙)が現在する背景には、変容をとげつつも仏教崇拝の地として寺院跡もしくは寺院そのものの活動が存続していた可能性を有する。室町時代後半以降には、あるいは、寺院又は寺地を「城」とした中世城館が所在し、土壘(土塙)等が補強、増築されたことも想定される。

土壘（土塙）の形成時期が、創建期まで遡るかどうか、今後の重要な検討課題であるが、先述の如く第7調査区の遺構検出状況からは、再検討を講じる必要性があるものと考える。今後の調査のなかで、推定寺域北側及び東側土壘（土塙）について、断ち割り調査を含めて形成時期についての検討を図る必要があろう。

- (5) 第7調査区のS B 2～4・SG 1・S A 1～3・S D 4～6・S K 1, 2等は、土佐国分寺跡の変遷を究明するうえで主要な遺構である。これらの遺構は、推定寺域のなかでは僧房に関連する建物群として位置付けることができるが、伽藍配置の不明確な現状では推定寺域北側に所在する建物群等として評価しておくことにしたい。

S B 2・SG 1等の検出状況からは、調査区北側・西側への遺構形成が認められ、S B 2・SG 1形成時の寺域はまさに北側に所在することが明白である。SG 1が西面廻廊とすれば、調査区北側の畠地に主要遺構が形成されているものと考えられる。S B 2, 4・SG 1・S A 1～3の位置付けについては、調査区北側・西側での今後の発掘調査成果を加味して検討する必要があろう。

検出遺構の埋土中からは、須恵器・土師器等の細片の土器片が出土している。出土遺物の内容及び遺構の重複関係等から、検出遺構の概要にふれれば以下のとおりである。

I期 S B 3

II期 S B 2・4, SG 1, S A 2

III期 S A 1・3

IV期 S K 1・2

I期のS B 3は、柱穴中の出土遺物から白鳳時代後期～奈良時代初頭に、II期は奈良時代中頃を前後とする時期に、またIII期は奈良時代中頃～後半に、IV期は奈良時代末～平安時代前半に位置付けられよう。また、V期として、S B 4の柱穴と重複関係をもつ、南北棟の北妻とみられる柱穴列は、平安時代前半～中頃に形成されたものと考えられる。なお、S B 2～4・SG 1等は、柱穴列の方向による建物主軸から、3類に区分され、S B 2・4, SG 1・S A 2にはII期のなかでも形成時期に相違があることがうかがわれる。

- (6) 第1・2次発掘調査の成果から、土佐国分寺跡に関連する主要な遺構が検出され、伽藍配置等についての手掛けが得られつつある。また、検出遺構の内容等から、従来の土佐国分寺跡観に再検討を促す問題提起も生じている。S B 1～3等の柱穴中からは、白鳳後期～奈良時代初頭に属する土器片が出土し、国分寺創建前の建物址である可能性も具備することから、寺院創建期についての検討も課題となりつつある。また、SG 1・S B 2等は推定寺域外に遺構形成が行われていることを示しており、寺域の推定・検討に有力な現存遺構とみられてきた土壘（土塙）の形成時期についても再考の必要が生じてきた。

先行寺院跡の有無・検出遺構の評価等、今後詳細な検討作業を要する課題が多いが、調査によって得られた資料の検証によって、さらに具体的な実像が明確になるものと考える。

今回の調査で、未確認であった主要遺構が検出され、検討課題が蓄積されたことの意義は深く、今後の発掘調査による遺構確認に期待がもたれる。

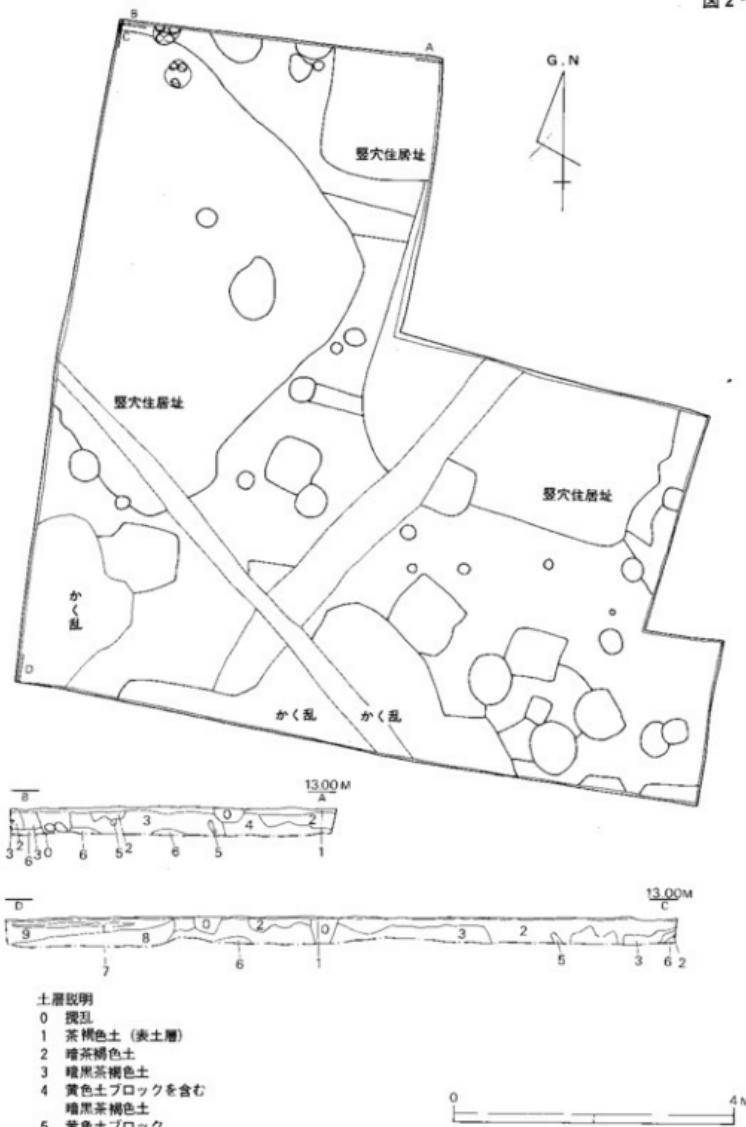
# 図面・図版

図 1

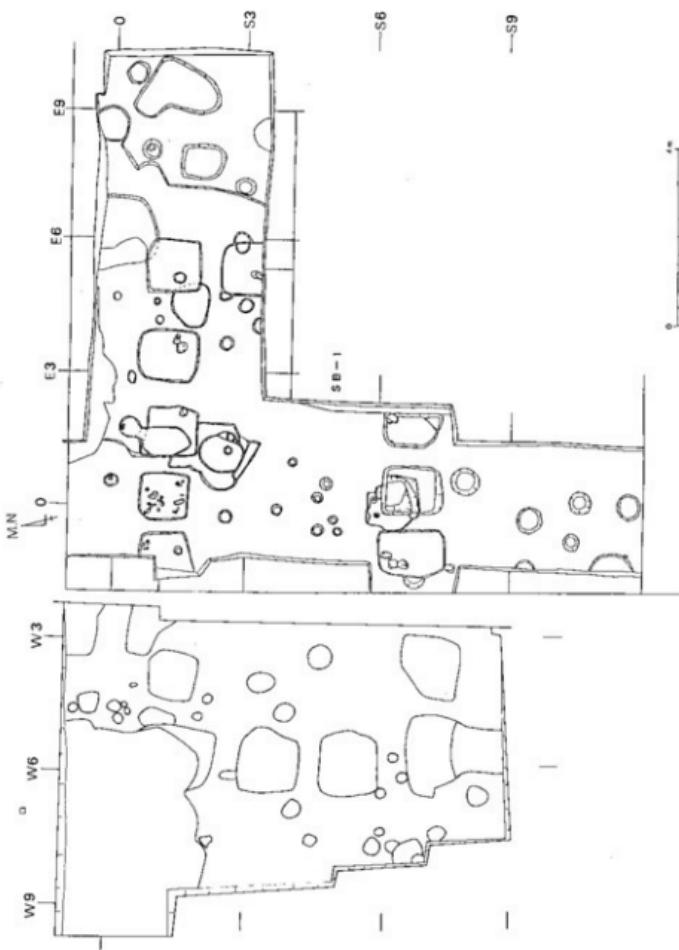


土佐国分寺跡概要図

図 2-1

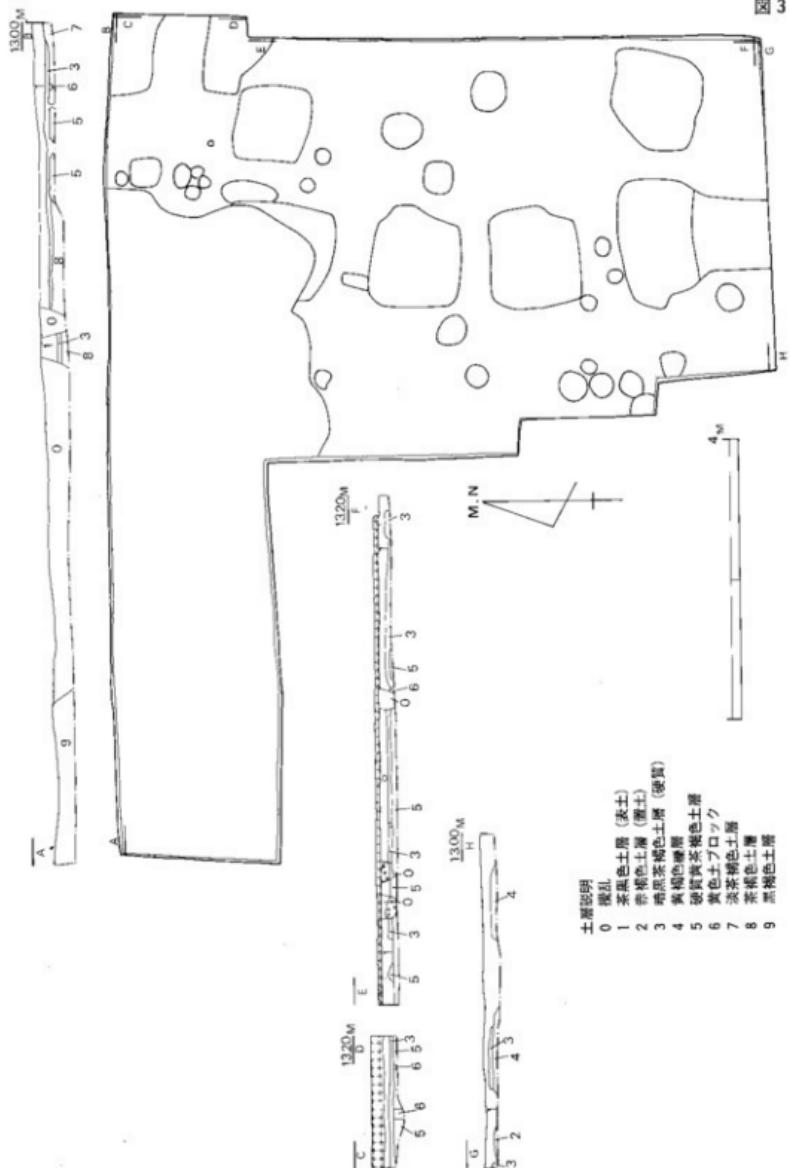


第5調査区（鐘楼西側地区） S B 1 検出状態図



第5調査区（鐘楼西側地区）  
遺構平面図 SB 1

図 3

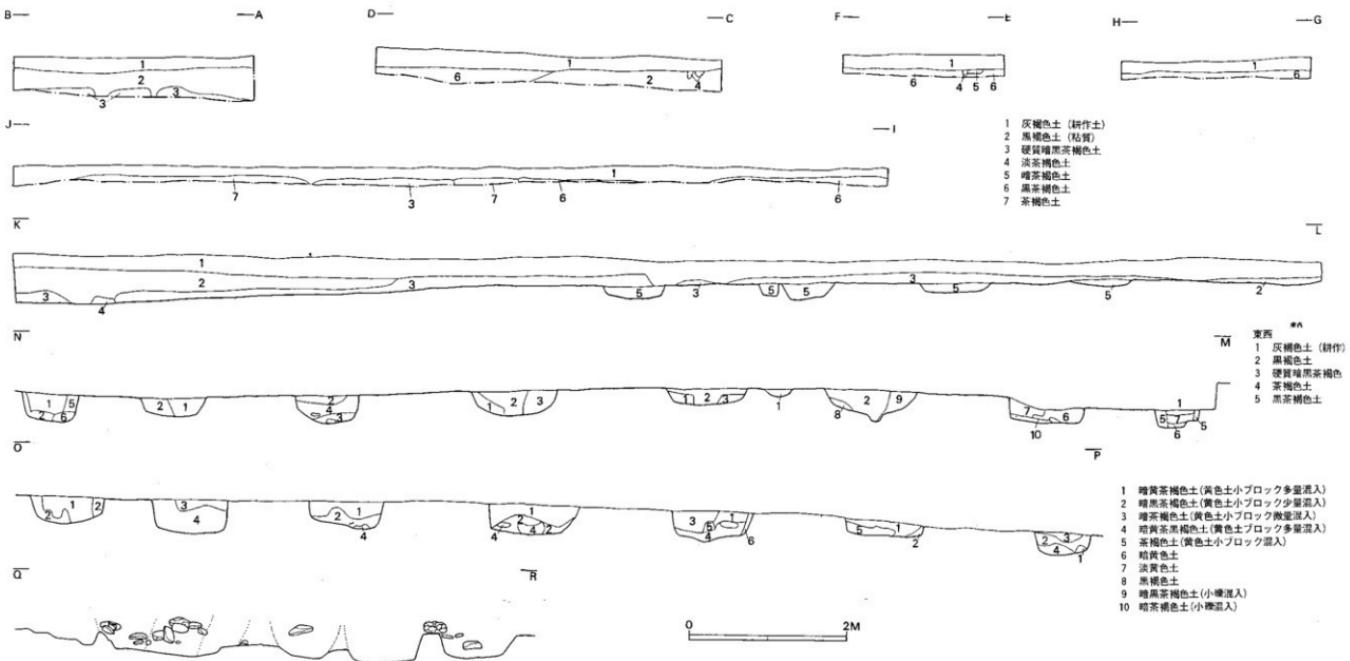


第6調査区（大師堂前地区）遺構平面図

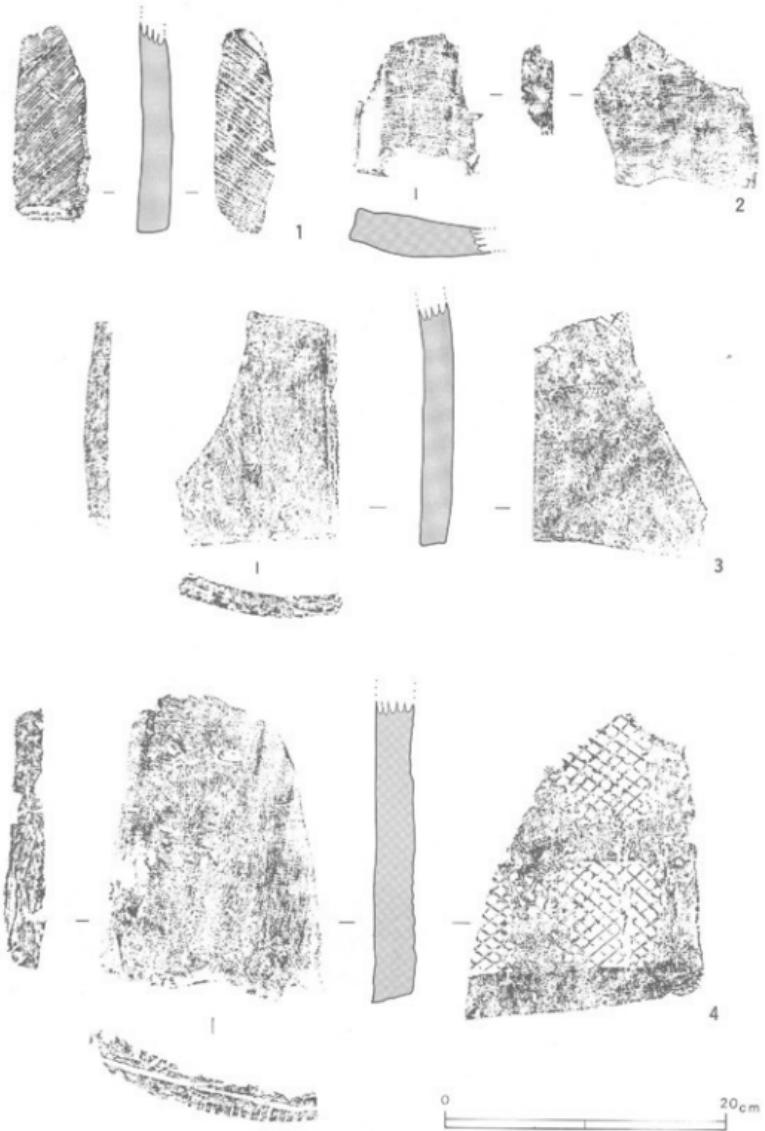


第7調査区（金堂北側地区）  
遺構平面図

図 5

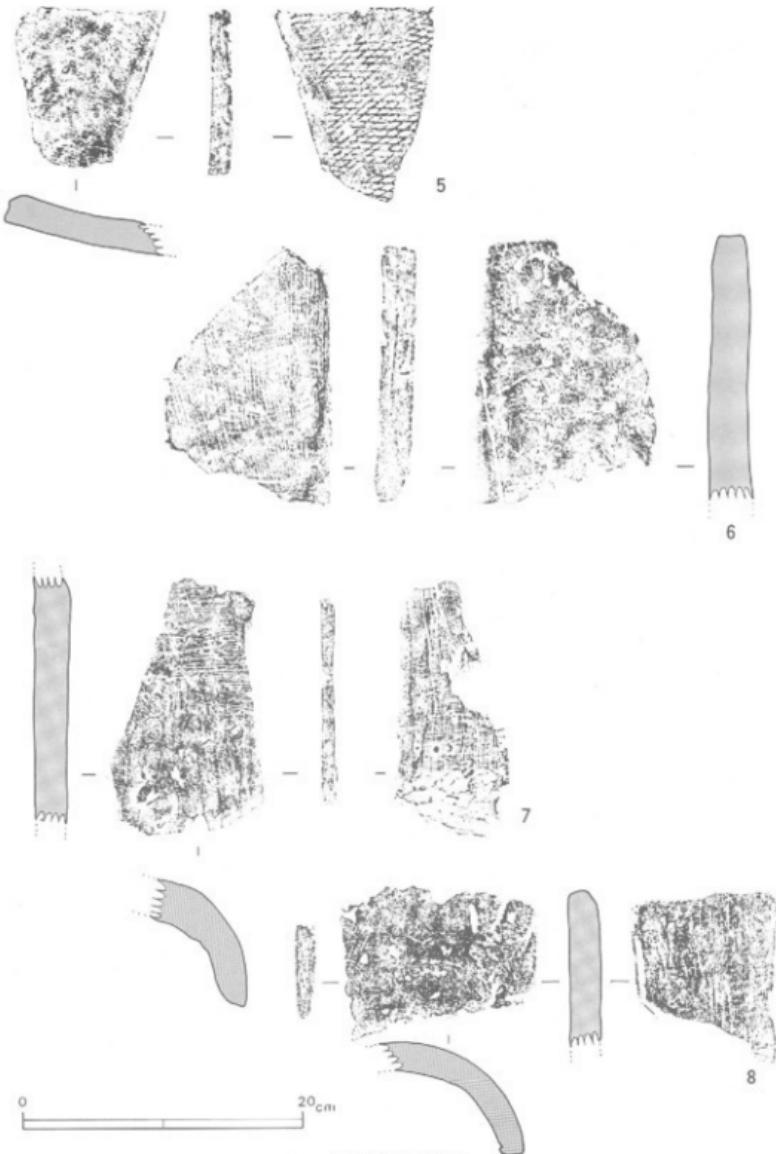


第 7 調査区 土層断面図



金堂裏出土瓦 (1)

図 7

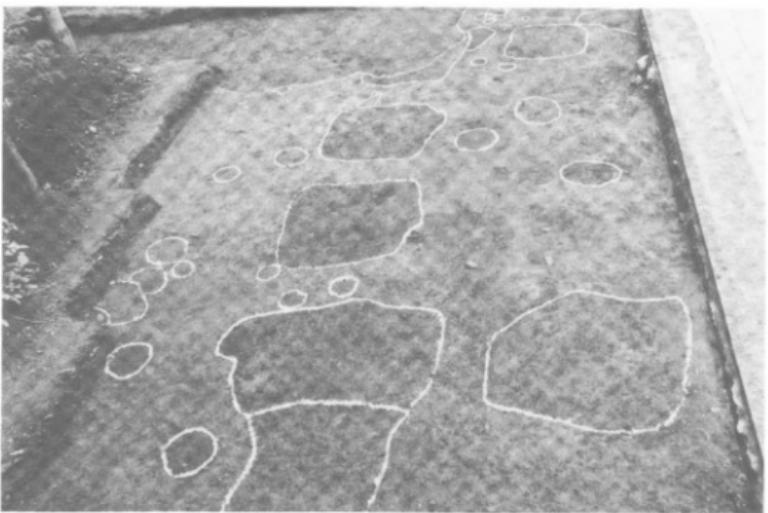


金堂裏出土瓦 (2)

# 図 版



第5調査区(鐘楼西侧地区) S B 1検出状態(東から)



同上(南から)



第6調査区(大師堂前地区)遺構検出状態(南東から)



同上(北から)



第7調査区(金堂北側地区)遺構検出状態(南から)



遺構検出状態(南から)



第7調査区全景（南から）



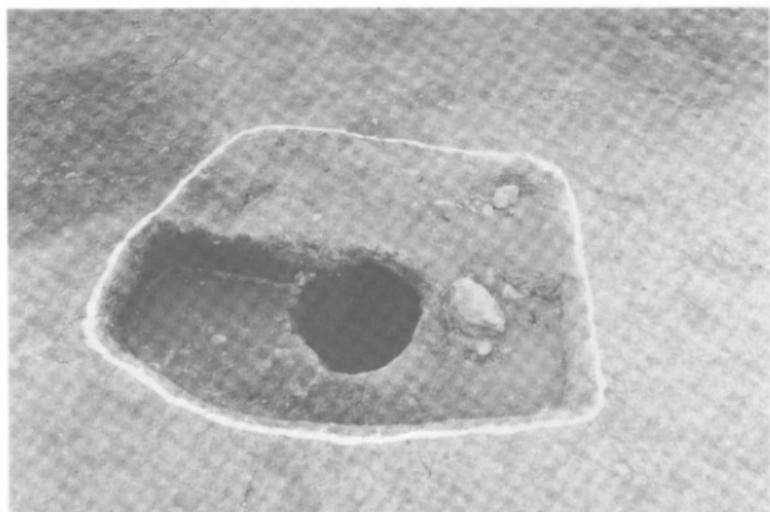
S B 4 柱穴検出状態（東から）



S B 4 北側柱穴検出状態（東から）



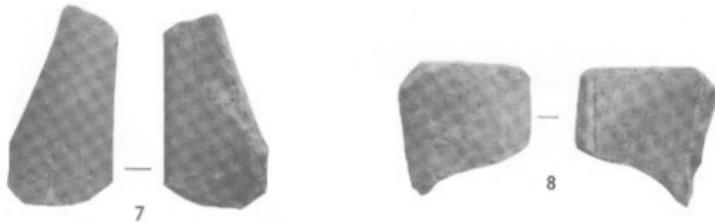
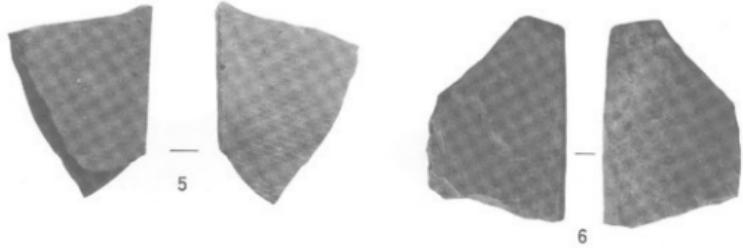
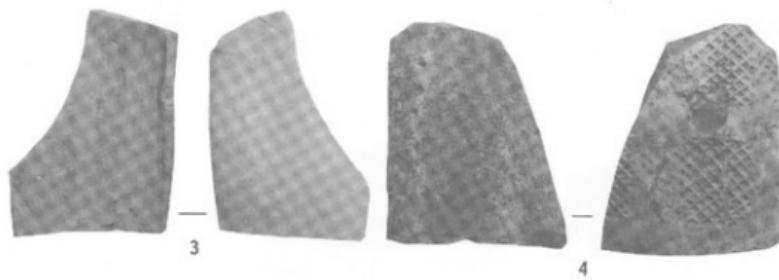
S D 5 検出状態（北から）



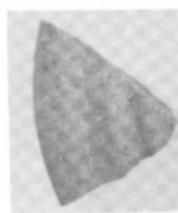
S B 3 柱 穴 (東から)



S G 1 柱 穴 (東から)



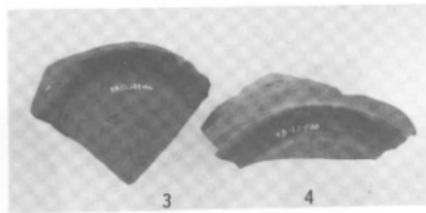
第7調査区出土瓦



1

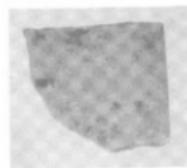


2

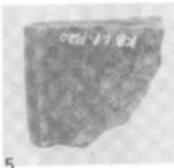


3

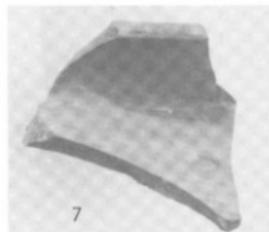
4



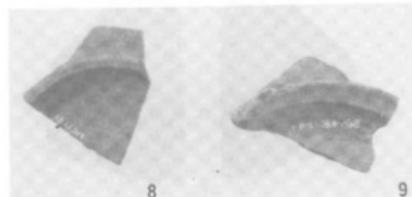
5



6

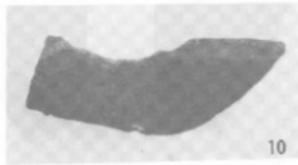


7



8

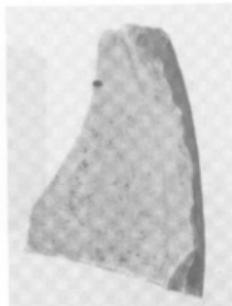
9



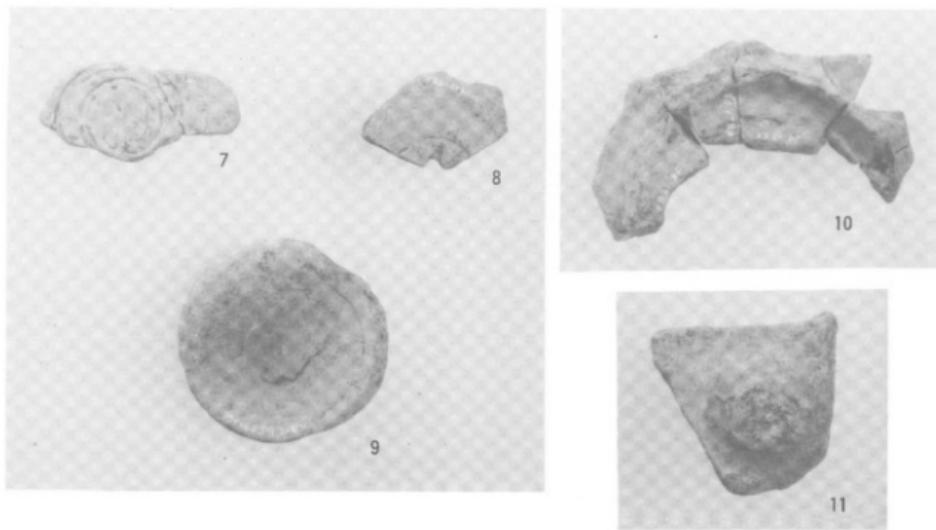
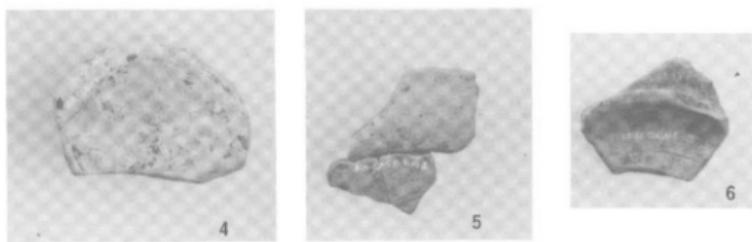
10



11



12



出土遺物（土師器）

土佐国分寺跡

— 第2次調査概報 —

平成元年3月31日

編集・発行 南国市教育委員会

印 刷 平和プリント